

保育者の日々の実践を支える「朝会」の機能

塚本美起子(東京家政大学大学院生)※

1. 問題の所在と目的

本研究の目的は、幼稚園における「朝会」が、保育者の日々の実践を支える機能を持ちうるのか、持ちうるすれほどのような機能なのかを明らかにすることである。

保育者の日々の実践を支える機能を持つものとしては、園内研究が挙げられる。実際に、園内研究が、園内の協働や保育実践に向かうために有効であることが、秋田¹⁾、岸井²⁾、中坪³⁾など、多くの研究によって述べられている。しかし、「朝会」についての研究は見当たらなかった。また、その機能についても明らかにされていない。

幼稚園の教育は、幼稚園教育要領に示されている通り「幼児の自発的な活動としての遊び」⁴⁾を中心として行われるため、保育者は、幼児が始めた遊びの展開に、丁寧に即応しつつ、具体的実践を構想しなければならない。そのことを考慮すると、筆者は、園内研究において教員同士が理解し合ったことを、日々の具体的実践につなぐために、「朝会」が機能することが必要だと考えている。

そこで、本研究では、「朝会」の事例を考察することによって、「朝会」の持つ機能を明らかにすることを目的とする。なお、ここでいう「朝会」とは、毎朝、幼児が登園する直前に30分程度、全職員が集まって、各担任がその日の保育の構想など話し合う会のことである。

2. 方法

公立A幼稚園における「朝会」での話し合いの記録(ICレコーダー)とその後の保育の記録を併せて1事例とし、考察する。朝会の参加者は、園長、主任、4、5歳児担任各2名、主事他職員全員である。記録にあたっては承諾を得るとともに個人を特定できないように配慮した。

3. 事例(20XX年6月X日)と考察

【事例1-①「朝会」での発言の記録(一部抜粋)】

A: 昨日シャボン玉を出したんですけど、すごく喜んでやっていた子と吹き方がわからない子もまだまだいて…(中略)…遊びながらやっていきたいなと思います。でも、今日は雨が降りそうなので、外には出られないかなと思うので、女の子が玄関ホールでショーごっこを始めていたので、またやるかなと思うのでのカセットを準備したり、あと小麦粉粘土もまた出しておこうかなと思います

C: 今日は風が強いじゃない。こんな時シャボン玉するのはどうかな。たくさんパ〜って飛んで楽しくならないかなあ。雨も降りそうでしょう。こういう天気ってね、湿度も高いからシャボン玉がよく膨らむのよ。園庭に準備して、ビールケースなんか置いておくと、少し高いところから吹いたり、子どもがいろいろ思いつくと思うよ。ジメジメした日は、心がパ〜と晴れる、開放される遊びがうれしいよね

B: ああ、面白そう。

※A保育者とB保育者は同じ4歳児担任で前日しゃぼん玉と一緒にやっていた。C保育者は園長

A保育者の発言からは、昨日楽しんだシャボン玉を幼児達は今日もやりたいだろうと予想し、また、保育者自身もその遊びの継続はこれまでの園内研究などから重要なことを理解しながら、雨が降りそうだからできないので、室内の遊びに切り替えざるを得ないと「葛藤」していると捉えられる。これに対してC保育者は経験から、

雨の降り方によっては、湿度が高いからこそそのシャボン玉の楽しさがあることを伝えている。そして、「園庭に準備して」や「たくさん、パ〜と飛んで楽しく…」など、雨の日のシャボン玉の楽しさについて具体的な保育実践のイメージを添えて発言している。B保育者の発言は、C保育者の発言によって「葛藤」を解消し、新たに具体的な実践を構想した上でのものと考えられる。

【事例1-②発言の後のこの日の保育(一部抜粋)】

霧の中をたくさんシャボン玉が飛び交い、幼児達は夢中になって飛び交うシャボン玉を追いかけ両手で割ろうとしたり、シャボン玉の間をくるくる回ったり全身でシャボン玉を味わった。湿度が高いので、シャボン玉は容易には壊れないのでいつもより多く、長く飛ぶ。幼児達は、次々とふくらまして遊び、「シャボン玉も風と遊んでるよ」などのつぶやきも聞かれた。A、B保育者も幼児の言葉にうなずきながら、幼児と共に風に舞うシャボン玉を追って遊んでいた。

A、B保育者は具体的な実践の見通しが持てたことで、やってみようという気持ちにつながった。そして、実際にやってみることで、幼児にとって霧の日という新たなシャボン玉遊びの魅力を実感として理解することにつながったと考えられる。

4. 全体考察

A幼稚園では園内研究の中で一人一人の遊びの充実という目指すべき方向もある程度共通になっている。しかし、シャボン玉の事例のように、目指すべき方向が共有されていても、状況の変化に対応する具体的実践が構想できずに「葛藤」することが明らかになったといえよう。

また、「朝会」という保育直前にその日の具体的な実践のイメージを話題にすることで、自らの葛藤や実践のイメージを自覚することもできる。時には、この事例のように、葛藤から解放されて新たな実践につながることで、保育者自身が手応えを持つこともある。さらに、話し合いに参加している中で、発言者以外の保育者のその日の保育の構想が変わることもある。(例えば、Bの発言参照)

すでに述べたように、保育者の日々の実践を支える機能を持つものとしては、園内研究が挙げられる。しかし、本研究からは、園内研究だけでは、困難な面があることが明らかになった。そして、今回取り上げたのは1事例ではあるが、「朝会」は、園内研究と日々の具体的な実践をつなぎ、個々の保育者の実践をチームとして支える機能を持ちうるようになった。

【引用・参考文献】

- 1) 秋田喜代美(2011). これからの園内研修—育ち合う組織作りに向けて本実践から学ぶこと 秋田喜代美(監) 松山ますよ(著)「参加型園内研修のすすめ」—学び合いの「場づくり」— ぎょうせい
 - 2) 岸井恵子(2016). 園内研修 保育学講座4 保育者を生きる 専門性と養成 日本保育学会編 東京大学出版
 - 3) 中坪典典(2013) 保育者の専門性を高める園内研修—多様な感情交流の場のデザイン— 発達134 ミネルヴァ書房
 - 4) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成20年 フレーベル
- ※人間生活学総合研究科 児童学児童教育学専攻